

序文

大西 正幸

「地球研言語記述論集」が発刊の運びとなった。論集の母体となった「記述言語研究会」設立の動機については長田さんが書いているのでここには繰り返さない。ここでは、研究会の基本的なスタンスと、論集の編集方針について述べたあと、今号に掲載された、ニック・エヴァンズの講演録や、メンバーの論文や資料等について、簡単な紹介をすることにしたい。

「言語記述研究会」のメンバーは、まったく記述がない、あるいは記述が不十分である言語を対象に、フィールドワークを行ない、データを収集し、その文法を記述することを志している。月一度の研究会では、特定の文法現象や言語を記述した論文や文法書を分析する、メンバーが発表した／あるいは発表予定の論文や資料集を検討する、等、記述の方法論を学ぶための勉強会と研究会を兼ねた活動をしている。研究会以外にも、メーリングリストやホームページを通じて日常的に情報や意見の交換を行なっている。また、海外から訪れる研究者を招いての、ワークショップやセミナーを企画／運営も行なう。こうした活動については、ぜひ私たちのホームページを見ていただきたい。

要するに、言語記述に役立つことは何でもやろう、というのが、私たちのスタンスである。

こうした研究会なので、当然ながら、そのメンバーが発刊する論集も、言語記述に役立つものは何でも載せる、というスタンスを取る。つまり、一定のフォーマットに従って完成された専門的な論文だけではなく、分析半ばの語彙やテキストなどの言語資料、調査途中で結論が出ていない文法現象の記述、文法書の特定の章など、記述文法を仕上げる途上にある研究や、「記録」としてのデータの類も、すべて掲載するという立場である。

言語記述は、息の長い仕事である。昔の研究者は、一生かけて一つの言語に付き合うというのがふつうだった。それが近年では、博士課程3、4年でとにもかくにも文法を仕上げ、そのあとも、業績という名の体裁だけは整った論文を、次から次へと追われるように発表しなければならない、異常な世の中になった。こうした圧力に振り回される若い研究者たちには同情を禁じえない。このような状況が、学問の貧困化をもたらしているのではないかという強い懸念がある。記述本来の目的から言えば、これは本末転倒である。要は、ひとりひとりが、自分が愛する言語やその話者との付き合いを大切にし、できることを一步一步積み重ねて行けばいいのである。この論集は、その途上の、里程標のようなものを発表する場である。

論集を編むに際し、もう一つ、メンバーの間で決めたことがある。基本的に、日本語で書かれたものだけを載せる、という方針である。(もちろんそれに加えて他の言語を用いることを排除しない。たとえば、テキスト分析で用いる文法用語に英語に依拠したメタ言語を用いる、あるいは、語彙集の訳語に日本語以外の言語、たとえば英語や中国語などの訳語を加える場合など。)

近年、言語学の論文や文法書は、英語で書かれる傾向が強くなった。言語学の長い伝統があるドイツやフランスのような国の学者でも、自国語より英語で書くケースが増えて来たとし、アジアでもその傾向はだんだん強くなっている。私の場合も、海外の大学や研究所で言語学を学び研究してきたので、ほとんどの論文を英語で書いてきた。しかし、「言語多様性」、「伝統言語の保全と継承」を建前にしている研究者が、自分の母語である民族語で論文を書かないことへの違和感を、ずっと抱き続けてきた。今日、英語で専門的な論文を書きたければ、発表の場所・機会はいくらでもある。逆に、日本語で、専門性の高い論文から資料集に至るまで、自由に発表できる場というのは、ありそうでなかなかない。このような方針を採ったことよって、日本語での記述言語学の仕事に、少しでも貢献できれば、と願っている。

さて、ここで、「論集」第一号の内容紹介に移ることにする。

巻頭のニコラス・エヴァンズ講演録は、去年(2008年)の1月9日、京大百周年記念館で行なわれたワークショップ‘How to write a grammar of an undescribed language’の、講演部分の翻訳である。この講演の音声録音を、「論集」の共同編集者である稲垣和也さんと私が書き起こし、それにニコラス・エヴァンズ自身が手を加えて編集してくれた。稲垣さんの翻訳は、その編集されたテキストに基づいている。読者の便宜を考え、私たちの判断で随時説明を加えている。なお、英語の原文は、今年の後半に発刊予定の、インダス・プロジェクトの Occasional Paper に掲載する予定である。当日の講演では、このあと、記述研究の具体例としての「相互態」の研究をめぐる話も用意されていたのだが、前半だけで1時間半を越える長さとなったため割愛された。さらに、講演のあと、参加者との間で、文法記述の具体的な問題をめぐる活発な議論が交わされたが、この部分は訳されていない。

ニコラス・エヴァンズは、オーストラリアの先住民諸語の専門家であり、フィールドワークに基づく記述言語学と言語類型論の研究では、世界の第一人者である。彼の「カヤディルド語文法」は、記述文法書としては模範的なもので、私たちの研究会でも何回かに分けて勉強したことがある。この講演は、言語記述をめぐる理論的/具体的問題を、実践者の立場から実に生き生きと語ってくれたもので、記述言語学や言語類型論の研究を志す学生や研究者には、示唆に富む内容となっていると思う。なお、付け加えると、インダス・プロジェクトでは、間もなく出版される彼の最新著作 *Dying Words* (Blackwell) の、日本語版を作る作業を始めている。私たちはこの作業を、単なる翻訳ではなく、ニコラス・エヴァンズと共同で、

日本人のための新しい言語学の教科書を創る仕事と考えている。

次に、研究会メンバーの論文／資料集の紹介に入る。

長田俊樹さんの「ムンダ語の感情語」は、長年この言語と向き合っている彼の最新の論文である。南アジア諸言語の重要な特徴のひとつとされる「感情語」とは、オーストロアジア語族や南アジア言語領域論で *expressives* と呼ばれているものである。論文は、まず、この用語をめぐる研究背景を紹介し、定義を行なったあと、ムンダ語の「感情語」を、豊富な例を使って、形態論的に分析している。それに続く各章では、統語論、意味論、音韻論の3つのレベルでの分析をめぐり、その方法論や今後の課題をそれぞれ論じている。そして最後に、ムンダ諸語間の比較研究や南アジア領域論への展開を予兆して締めくくられている。インドスプロジェクト言語研究会では、来年度から、「感情語」を含むいくつかの文法領域を対象に、南アジア領域論の検討を行なう予定である。「感情語」に関しては、この論文を出発点に、南アジア諸語の比較研究を行なうことになる。

下地理則さんの「伊良部方言におけるコピュラ文の構造」は、南琉球語の宮古方言群に属する伊良部方言のコピュラ文を類型論的な立場から論じたものである。論文では、まず、「他動コピュラ文」を含む伊良部方言のコピュラ文を、形態／統語的な面から詳細に記述している。そして、コピュラ文を通言語的に、主語、コピュラ補語とコピュラ述語からなる動詞文や名詞文とは別のタイプの文として扱う、Dixon などの類型論的立場に、疑義を呈している。なお、下地理則さんは、昨年（2008年）オーストラリア国立大学で、伊良部方言の記述文法を完成させた。英語で書かれた琉球語の記述文法としては、これまででおそらくもっとも包括的な内容のものである。

野島本泰さんの「ブヌン語（南部方言）における三種類の「前置詞」」は、台湾のオーストロネシア語であるブヌン語南部方言の、場所表現をめぐる複雑な文法現象を、精密に分析している。場所名詞と所格前置詞の組み合わせによる典型的な所格表現と、場所名詞から派生した動詞として扱うべきもの（「空間動詞」）の間に、中間的なタイプがさらに2種類ある。その形態／統語的振舞いや意味特徴を見ると、名詞的特徴と動詞的特徴を併せもっており、連続体の中に位置づけられる、という分析である。ブヌン語は、いわゆるフィリピン・タイプのオーストロネシア語で、動詞節の構造や品詞分類の記述の難しさで知られている。ニコラス・エヴァンスが「複雑に結びついた問題（‘nodal problem’）」を持つ言語と呼ぶものの典型的な例である。そのような現象が文法の隅々にまで行き渡っていることを示し、またその分析方法を私たちに例示してくれた、力のこもった論文であると思う。

千田俊太郎さんの「ドム語の多義－知覚動詞を中心に」は、パプア諸語の一つであるドム語の、二つの知覚動詞、*ʋkan-*「見る」と *ʋpl-*「聞く」を中心に、その多義性を論じている。それぞれの意味を、その共時的な形態・統語環境に即して緻密に分析するとともに、トクピ

シン語の翻訳データや、類型論的研究の方法論を使って、これらの動詞の基本的な意味と、意味の拡張の方向を再構成している。Anna Wierzbicka の NSM 理論や、意味拡張に関する最近の研究を批判しながら、新たな視点を提供しており、大変広い射程を持つ、優れた内容の論文となっている。

鈴木博之 / 供邱澤仁さんの「ヒャルチベット語松潘・山巴方言における *snang* の用法」は、ヒャルチベット語のこの方言における、所有 / 存在を表す「述語動詞」*snang* を、もう一つの「述語動詞」*yod* との対照において論じている。さまざまな統語論的 / 語用論的環境における両者の分布をていねいに記述し、その分布の意味を考察している。いわば調査途上段階での報告であるが、明らかになった点と今後の課題が、よく整理されている。音声学・音韻論が専門の鈴木さんの、統語論を手がけたはじめての論文、ということで、その意欲を高く評価したい。

富田愛佳さんの「『車里訳語』における音写漢字子音の特徴」は、彼女が専門にするタイ・ルー語の語彙を記録した、18 世紀の漢字資料を分析したものである。現代のタイ・ルー語や雲南方言の資料、北京語の歴史的変化等を参照しながら、当時のタイ・ルー語の音写に使われた漢字音の特徴に迫っている。音節初頭子音と音節末子音に限った分析だが、それでもその特徴がかなり詳細に浮かび上がってきている。今後、音調の分析を含め、この貴重な資料のより総合的な分析が進むものと期待され、その展開が楽しみである。

論集の最後を飾るのは、林由華さんの、池間方言の談話テキスト資料と簡易文法である。談話テキストの書起しには、元の音声資料の特徴をできるだけ表現できるよう、イントロネーション・ユニットをベースにした独自の分節規準を用いるなどの工夫がなされている。テキストは、記述文法の最後におまけのように掲載されることが多いが、この論文は逆にテキスト編集に焦点をあて、文法記述を従としたもので、文法記述の方法論としても面白い。なお、池間方言は、下地理則さんの伊良部方言と隣接しており、文法的にも類似点が多い。簡易文法は池間方言の文法の要点を的確にまとめてくれているので、下地論文を参照するのにも役立つ。

以上、掲載された翻訳 / 論文 / 資料は、メンバー間での議論や建設的なコメントを通して、時間をかけて完成されたもので、どれも大変充実した内容のものとなった。編集の稲垣さんをはじめ、メンバーの皆さんの努力を多としたい。